



1954年 1 月

天下の大學者が擔いでも、 いでいてさしつかえないと思うし なり」なのだから、別段一年中擔

これま

い。われくからいえばルックは 忘れてしまつていたのかも知れな

布にてつくりものを容れるもの

7 1 1

岳 本 山 會 H

一人の

英國の學者

松方

三郎

家以外にはあまり注意をひかなか 性質が違うだけに、その道の専門 ついては、國際理論物理學會とは 周年紀念のために來朝したことに 教授が日本の化學會の創立七十五

りかで手紙をくれた人があつた。 たのを見て、おまえのことを思 カレッジのクールソン教授がルッ 外あの寫真を見たといつて話をす の目にふれることはないが、ルッ 出したといつて、九州から何年振 クサックを擔いだ寫真が新聞に出 ると同時にルックをすて、 人の一般はいもの買出し時代が終 る人が多いところを見ると、日本 思い出したというのらしいが、案 クの方は誰にでも見えるから、 に入れていても、出さなければ人 「山日記」の方は一年中ポケット 友人はあの寫真を見て、ぼくを 理論物理學會に來たキングス・ 同時に そ

かつたこと」思う。ルックサック 登山等で名を知られた人であると ル賞のロビンソン教授が、英國の つたようだし、 今から四年前、 ビンソン教授の入會は一九四九年 ン・クラブとはいつてもそうざら これは別段おかしなことではない ルやフォーブスを擧げるまでもな さしつかえないことだし、チンダ 先生がアルプスを歩き廻つて一向 と同じように、山にしても誰が登 いうことに氣のついた人は り數えるほどの大物だということ でに來た全ての學者の中でも指折 一人者だそうだし、 といえば世界の有機化學界では第 に當るから、 にいるわけではない。もつともロ 大學者となると、如何にアルパイ のだが、さすがにノーベル賞級の 知られた人は少くないのだから、 く英國の科學界の先輩で山で名を つてもい」ので、ノーベル賞の大 古顔ではなく。 メムバーとし決して ことにこのノーベ 教授の六十三の年 何でもロビンソン 日本にこれま 一層少

九三九年にサーの稱號を授けられ 「フース・フー」を見ると、

らオックスフォードのロビンソン

ところでそのあとで同じ英國か

方が變なのだ。

てもい」ので、

これを物珍しがる 何時使つ

いゝかえれば誰が、

一向さしつかえないと思うの

ピンソン先生はそう考えているか もい」のかも知れないし、 でいるのだから驚くの他ない。そ 々メダリストというのが七つ列ん と十五、教授の講座を持つこと五 ろの大學から學位をおくられるこ 賞のまたその上を行つたといつて 代的に新しいのだから、ノーベル れから見るとA・C會員は一番年 たというところから始つていろい 一九四七年のノーベル賞までに何

旅行で二日違いで出られない、 の集りがあるのだが、おれはこの スフォードで山岳會(O·M·C) いつた調子。そして、實はオック な聲で、フィア・エーゼルだよと か――どの尾根かときくと、 間前にダン・ブランシに登つたと 入つたとか、やれ大戦の起る一週 女房と一緒にオーストリアの山 るとなか (熱心で、やれ今年は 迎をかねた集りでも、山の話にな 歸るという忙しい間に催された送 いうのが、まことに残念そうだつ その證據に、 今夜羽田をたつて 小さ

年をとつてしまうから、 たが、 しかし、餘り先きになるとおれも 七階のブリティッシ・カウンシ ム、というのが別れの言葉だつ 英國に來たら是非訪ねること、 主客で一ぱいになつた丸善 早い方が

面を送つた。

歸りの車の中で、

あの老人は六

も知れない。

妙な氣持だつた。 しているのは、われながら幾分奇 わりもない山の話を、二人だけで ながら、まわりの人とは何のから 流れが渦をまいている真中に立ち ルの圖書室で煙草の煙と、 會話の

日本側でも、 ないのは心残りだといつていたが の山も見たいのだが、それが出來 本に滞在出來たならば、 あきれていたが、先生は醉狂どこ 十三でA・Cの會員になつたのだ ろではなく大眞面目だつたに相異 よ、と連れに話したら、 人もあるものだといつた顔をして ロビンソン教授はもつと永く日 ゆつくり山の話を聞きたか 若しそうだったら 物好きな 是非日本

より招待状 オーストリ山岳会

上報告する次第である。 たと思う人もあると思うので、

以

開催するからウィーンへ、JAC 年は同會創立七十五周年にあたり で行くすべもないので、 の書面が届いた。 の代表一名おいでいたゞきたい旨 いする」の祝電を發し、 十二月四日講演會、五日晩餐會を ★昨秋オーストリー山岳會から本 「貴會の七十五周年を心からお祝 遙々ウィーンま 同時に

工 ヴ 工 V ス 1 登 頂

報告書と映画 VC 0 い 7

11

田

空の郵便税の方が二倍も高かつた か十五日には待望の本が私の手許 空便で送らせてくれたので、 書店に來るというのを聞きつけて 月十二日だつた。前景氣のすごか タウトンから刊行されたのは十一 受けて來たホッダー・アンド・ス ロンドンの友人が、強引にこれを つたこの本が刊行の二日前に一冊 スト登頂の報告書 "The が、これは私を驚喜させるに足る に届いたのであつた。本代よりも いらい、その報告書の出版を引 Everest"が、一九三三年の遠 ハント隊長が執筆したエヴェレ たし

ト登頂』の記錄を讀めることにな ついに今度は〃完成されたアドヴ がシプトンによつて報告されたが 以後も一九三八年の遠征がティ ェンチュア〃と題していた。それ 年の報告書にはラトレッデ隊長が の遠征隊報告が刊行されているこ つた。人ごとながらホッ ェンチュアッとして。エヴェレス マンによつて、一九五一年の偵察 "エヴェレスト―未完成のアドヴ とは周知のことである。一九三六 との三十二年間にいままで七冊 にもなりたくなる。 エヴェレスト報告がこんなに手 ٤ た氣

か

第五部でサウス・コルのCVI設置

ら二つの頂上攻撃について述べ

り早く出版されたことは今まで

なりが詳述されて、

遠征隊を組

する際などには絶大な参考になる

専門的に参考となる資料なり説明

いつている。

附記の項ではさらに

て本文は第六部で山を降りて歸路 第十六章を執筆している。こうし とくに登頂に關してはヒラリーが

の記述となり、ハントの回想で

かつた。

今度は世界中

本書は菊版で本文二三二頁、附記 あるというところに、英國の物價 告書と今回のとが同じ二五シルで 九三六年までの五冊にくらべると 色寫真八枚、普通寫真四八頁。 もするが、 書上げるという強行軍をやらされ まき起した關 を眺めれば、こちらの方は隔世 前 して驚くのである。試みに十七年 の變動がいかに僅であるかを見出 版の感じを受けるが、三六年の報 四六版から菊版に縮少されて大衆 を入れて總計三百頁、これに天然 た。この點は少々惜しいような氣 ついにハント隊長は一月でこれを このわが國の本を取出して奧付け 版しようという要求が強くて、 有難い面も少くない。 心が消えないうち 0

る苦心が記されている。いよいよ ツェ・フェイスの急斜面を克服す Ⅳへの荷揚げの苦しい作業、ロー スフォールを乗越えてCIOの設置 準備、第三部はネパールに到着し を序論風に記し、第二部で計畫と に分れて、第一部では回顧と展望 感ありというところだろう。 成功するまで、第四部ではさら 閑話休題、本文は六部第十八章 西クームの前進根據地となるC キャンプを設置し、問題のアイ から、クーンブ氷河上にベース

T

K K ものだつた。

をそそるのだが、そのなかでも實 からは、もちろんわれわれの興味 いたことが判るのである。 よりは英連邦全體の支援を受けて に準備段階ですでに全國的という なかつたことを感じさせる。 ふくんで、しかも仕事の並大抵で ントの語るところは、ユーモアを 考、新裝備のテストなどまで、 ずといつた興味がある。隊員の あたりから、すでに巻をおく能 が、さすがにハントの本は準備 退屈を感じるものがないでもな 前後からキャラバンのあたり この種の遠征記の いよいよ氷雪の本舞臺に入つて な か かには 同時 出 選

ので、すべての計畫が軍隊的に作 これも軍人のワイリーが擔當し の上、遠征の補給、 大西洋軍の参謀を務めていた。 教官をしていたし、戰後も歩兵大 に山岳戰、雪中戰指導學校の主任 だとうなずける。ハントは大戦中 功をもたらした大きな要因の一つ 重、精密であつた點こそ今回の成を見出すのである。補給計畫の愼 て多くのことが述べられているの に補給作業についての配慮に關し 隊長をやつたり、遠征直前には北 装備などは、

量によつてのみ、アイスフォー ことがない」というほど揃つたテ このような綿密な計畫の上に立 成され、 て「誰一人一度も荒い口をきいた することに成功したのだというこ ルを頂上攻撃の強力な足だまりと の突破も、ローツェ・フェ ィームワークと個々のすぐれた力 が判るのである。 登もなし遂げられ、サウス・コ 遂行されたといつてよ ーイスの

國でも上映される「エヴェレ ことに、 この邊 りの努苦 1

と思われる。

二七・三五〇呎の高處まで重荷を ながら、サウス・コルから東南稜 ディロンとエヴァンズとを支援し 成されたかを完全に示している。 どれほどこの基盤の上にのつて達 かに大きかつたか、登頂の成功が らゆる點ですばらしいのだが、と 當して撮影した天然色映畫は、あ がサウス・コルままでをロウが れている。CNまでをストバー 征服」を見るとまざまざと表現 ハントは第一次預上攻撃のボー 補給などへの努力が

出席者は左の十八名

高野鷹藏

行される由。
行される由。
「おりません」
「おりません」 すすめする。) で執筆されてい 一號に「二十世世 れているの一十世紀の一十世紀の中 お書につ 間邊スト登 一讀を 一詞を 一詞を 一詞を 一記を 下一は ら兩頂 刊氏

名譽會員を圍 んて

ΛΔΔΔ

五十周年記念だけは何としても濟 壽を祝し合い、明後年の本會創立 のウィスキーで長老連お互いの長なられた同氏を圍み加賀氏御寄贈京され一同を悦ばした。八十歳に 野金次郎氏がわざ~~吉濱より上當日は本會創立者の一人たる岡 スライド映寫會を催した。 一田隊長の説明によりマナスル [書室に名譽會員の御參集を願 十一月廿九日午後一時より本 0 V

月二日付で左の如き御返事があ 尚當日越後の高頭氏宛に出席者一 同寄せ書を御送りしたところ十二 古澤滋 永信雄 次郎 成瀬岩雄 岡野金次郎 近藤茂吉 同令孃 神谷恭 三田幸夫 望月達夫 石坂昭二郎 加賀正太部 鳥山悌成 沼井鐵太郎 松田 冠田大 雄 5

扨て小宅も昨年十一月頃から山誠に有り難く嬉しく存じました 久々にて皆様の御通信を辱ふし りまする。 皆様の御出でを御待ち致して居 岳と云ふ旅館となりましたから タ々不備。 (成瀬記)

★山日記一 記九び五 一四年版

待に副えるものが出來上りまし かけしましたが、一月十九日ご期 から大いにご利用上さ が遅れて全國の皆様にご迷惑を 日 記一九五四年版は大變發 な

アンナブル ナ通信



今 西 寿 雄

迄の行動を記します。 ナプルナを北面から攻撃すること れで五、七八四米のナムン・バン ャンプに到着致しましたので今日 に致しました。昨日、ベース・キ デャンを越えて、豫定通りのアン 断ぜざるを得なくなりました。そ ★九月十七日 大障壁にさえぎられて、不可能と 私達の南面の登攀も偵察の結果

ネパールの石敷の道、 プで國境を越えた。印度の泥道、 すべて現地調達で行進せざるを得 食料は船積みしてあるので私達は 力を七十名集めて、十七日ディリ 時間許りでブッウワールに着、苦 いた。タライの森林地帯に入り四 プルナ山群が白銀を輝がやかせて 雲の切れ目から待望久しきアンナ フリーパス、ツウワールへの途次 からの指令がといいていて税關は 感じです。國境ではネパール政府 一残して出發。トラベル用の裝備 とシェルパ三名を後銭隊のため ノータンワからトラックとジー 一寸意外な

が開け、 タンシンの裏の丘へ出た所で眼 中央ネパールの巨峯ド

なくなつた。

は三十數キログラムの荷を擔いで は遅々として進まない。然し苦力 えていたが、登り、下り多く行程 ンダキを渡りポカラ迄五六日と考 はモンスーンも明けたのか、天候 よく頑張つてくれる。十九日から ナスル、ヒマル・チュリーが一望 ウラギリ、アンナプルナ山 た位である。青黒い流れのカリガ れ、しばし行進を忘れてしまつ

く歸りたいのかどんく、飛ばして

ハラ迄の契約なので最後の日は早

勞されたことを想い出し、なんだ 奥へ入つた。ヒルの大軍におそわ 又傭い變えて、マデイ・コーラの 二十八日最後の部落シクリスに着 出來得れば後發隊は空路を利用す のバイロワと、ポハラ、カトマン 通 早くポハラに着いた。 立教のナンダコット隊もヒルに苦 という苦力をやつとのことで集め が駄目でした。お祭りで六ケしい 若しかと云う希望をいだいていた る様ディリーに頼んでおいたので ズ、シムラを一週しているらしい んと血を吸われた。ヒルと云えば れ、私達は勿論のこと、苦力もう て、ポハラの苦力は駄目、ここで 昨日から私達の上空を飛行機が た。シクリスからは山がふかく い出した。ブツウワールの近く

★十月三日 このベース・ハウスからは谷が

けたところまで入つた。

て、私達がベース・ハウスと名付

懐しい氣もした。三日かかつ

か

迫つていてラムジュンの稜線が見

えるのみでアンナブルナはよく判

も安定して來た。 ブツウワールで構つた苦力はポ

みの綱も切れてしまつた。 四千米まで登つてみたが最後の望 持てるというので更に今西、藤村 フイルムをよく見ると未だ希望が ウスに歸りました。伊藤が撮つた から出ている南稜の末端双子山の は三日間の豫定でアンナプルナⅣ ん底に突落された思いでベースハ この南面の断層地形に私達はど

ことに決定しました。 スハウスに到着していた。こゝで 名は十九日やつとカルカッタをた ★十月十日 によりアンナプルナNを攻撃する ・コーラからティルマン・ルート ンを越えて北面のマルシャンディ ち私達の偵察の終る一日前にベー 同協議の結果ナムン・バンジャ 後發隊の舟橋、藤平、脇坂の三

限度に止めBC、CIは現地食と 藤村とディリーを別動隊として移 して隊員、シェルパ、苦力で約一 餘の荷をポハラへ廻し、 でマディ・コーラと別れを告げた 屯の荷とトラベル中の食料を擔い か集らず、登攀用具、 をシクリスで募集したが二九名し を残し半屯許りをクディからマ ナムン・バンジャンまでの苦力 食料を最小 不要なも

らず、 端に着いてがつかりです。 マデイの本流に入つたが氷河の末 今西、伊藤は二日がかりで

落ちてくる。それが狭い谷間から 集つて時を選ばず大音響を立てム 障壁になつており、アンナプルナ 三〇〇〇米まですぽんと落ちて大 スフォールなのだが、それからは どつとマディに押出している。 の氷雪は漏斗狀になつた大障壁に 五〇〇米位までは雪と斜面とアイ アンナプルナILとNの斜面

私達はBCを四四○○米の岳樺

うことにした。

つてしまつた。 れにお祭りが近づいていたので歸 たが峠は雪で苦力は歩けない。そ い尾根筋を四日がかりで登りつ からオムン・バンジャンまでの

に着、アクリマテイゼーションは てマルシャンディのティモン部落 トンジェから苦力を呼びよせ、さ バンジャン越です(藤平のバロメ 十分、勇氣百倍、十九日昨年の今 しも苦難の峠越えも一週間を要し 數瓩の荷を擔いでの奮鬪、北面 ータでは五五○○米)隊員も二十 いよいよ五七八四米のナムン・

西隊のB・Cに着いた。 く御承知の通りです。 で實に樂です。この街道は皆樣よ ★十月二十日 南面にくらべ北面の山道は平坦

りした日でした。(BCにて誌す) 天候は大變よく雪烟もなくのんび 隊の跡、高度五〇〇〇米、今日も CIへ荷上げをした。場所は今西

ルシャンディ廻りで本隊の後を追 マディ・コーラのベースハウ

る豫定。 のBCはCI こを食料買出しの基地とし、實際 石楠花の最後地點まで上げた。 (約四九〇〇米) にす

三十五日目に漸くBCが建設でき た譯で隊員一同ほつとしたところ 私達がブツウワールを出發して 前途は多難です。アンナプルナ

№の前峯までがかなり技術的に困 プルナは雪烟もなく實に穩かな姿 す。秋色濃くなつた今日のアンナ からいよいよNの攻撃をはじめま の疲れもいえ今日一日休養。明日 こと、困難な條件が重つています。 難なのと稜線での寒氣と風との閉 を見せてくれました。 い、それに加えて日照時間の少い ★十月二十二日 しかしナムン・バンジャン越え



文面、丁度新橋のメッカ事件の直 狀だが、登山者のメッカ云々なる 覧會、即ち「秧高岳をめぐる」に 催と云うことでもあつたのだから 山なりテーマなりを選んで欲し 從つて雑多の山をほんの一枚二枚 ではあった。 致とは云え聊かくすぐつたいこと 後のことでもあつたし、遇然の したつもりである。その際の案内 郊の會員諸氏にはもれなくご案内 云うのだつた。東京在住の、又近 結局誰にでも向く山の寫真の と云うのが企劃の第一の希望だつ と取上げるよりは、どこか一つの た點數しか並べることが出來ない した。「穂高岳をめぐる」寫眞展と きな印象を得ている所の山なの た。しかも夏山のシーズン中に開 たりに入つた避暑客でも一應は大 實は畫廊の狹いことから限られ は先頃十年ぶりで個人展を催 自動車で上高地 - 登山者のメッ

南アルプスとその寫眞 · 船 越 好 文•

眞展をと云うのである。

ものらしく、敢えてその事を強く あると云うことを始めて知られた が、日本では富士山に次ぐ高峯で 佐倉氏は子息が遭難死された北岳 山をあまり御存知ないかのような の佐倉氏の書かれた記事である。 ツ子を山に弔う」なる毎日新聞社 など取上げられたのだ。「ひとり なる名稱やら、北岳なる山のこと わば大衆雑誌に大きく南アルプス が、展覧會とは別にこへで南ア とを云えば鬼がどうのと云うのだ プスを語ることは構りま 岳、穂高岳よりほんとに高いの かれておられた。事實未だに槍 た。と云うのは文藝春秋なる云 話に引ずり込まれることが多か この秋は意外な所で南アルプス iv

者が相も變らず少いということに だ。その結果が南アルプスの登山 としては他の山のように氣輕に飛 い。個人を中心とした登山の對象 本の山としては何と云うても大き たら笑われるかも知れないが、日 にスケールが大きいの何のと云う 過ぎるようだ。とのヒマラヤ時代 だ世間では南アルプスを知らなさ になり得る感なのである。 かい等と、一寸したクイズの材料 が足りなく、 もなるのだろうが、反面所謂宣傳 込めない深い山であることも事實 あるまいか しめることが出來なかつたのでは 廣くその存在を知ら まだま

い

てほんとに見て貰いたい氣持の寫 た次第だつたが、來年こそは南ア ような気持のひそむ展覧會となつ プスの寫眞展を、即ち作者とし そんな譯で何かしら割切れな 來年のこ 對象を數多く持つており、その方 アルプスと云う華美なる存在の方 縣なりの熱の入れ方がどうだつた に萬事傾くこと、これ又仕方がな 士山、五湖、昇仙峽などム觀光の を呼ぶにいる。山梨縣の場合は富 の施設の點からも手取早く登山客 が大衆受けもするし、交通その他 ろうか。思うに長野縣としては北 い。云わば兩縣からままつ子扱 そもそも關係の長野縣なり山梨

の辿つて來た道のりの野暮ツたさ 寧ろ逆効果を生んでおつた位のも 印刷から云うてもあまりに貧しく るのに比べたら費用も微々たるこ 傳これつとめたこともないではな 無論地元の観光組織も心がけて宣 と云うのが實狀だつたのだろう。 とでは理解されないらしい。 るにこの男の持味なり魅力なりと を氣の毒に思うのだが、考えて見 の。つくづく南アルプスなる大男 式のものに致つては、その體裁、 とだし、ポスター・リーフレット いようだが、縣として力瘤を入れ 云うものはちよつとやそつとのと に行つたことがあつた。その際荒

幾年か前、三月の赤石岳方面

角も登頂の際の感激に近く相手の

捉えたこの寫眞では、これ又立派

原生林の黒木も放射する赤外線を 山を程よく近づけて呉れたのだ又

られるのではないかと云うのも、 北アルプスのあちこちの如く崩 よりよく再現することこそ天與の な南アルプスの姿を寫真によつて はある。し 寧ろ私なんかも大賛成の一理屈で することもなく、昔の姿の儘で つた。この寫真にならないと云う 南アルプスをカメラ抱いて歩き廻 寫眞にならないことを承知しつゝ つとめのような氣がした。そして それは長野縣も山梨縣も、 かし、私の場合、好き

> 見れないし、 こちのように峨々たる稜線は先ず 越す山が十座もあるとは云え、そ である。それは北アルプスのあち の山々と大差ない感を與え勝なの の寫眞は素人目には奥多摩あたり 百も承知している。事實三千米を 番大きな障害になつていることを と寫真として難しいことを知るの その他なにかにと比較すれば自ず としてのアクサンになりきれない な存在はほんの少しであり、寫真 残雪などと云う華美

စ္° 的にアッピールするものを確かに 持つ。問題は夏山だ。コメツガ、 もなれば南アルプスの諸峯も直接 と云わんばかりの御批判をいたゞ 南アルプスの寫真としては落第 アルプスを見直したような、反面 を西穂高だと思つた等と云わば南 敬表したことだつたが、その寫真 川岳の西面を撮つたものを何 うなことが云えよう。大體これ等 撮つても同じ寫眞になると云うも それだけに、極端に云えば、誰が 等で展望をよくした所があつても は難しい。時々伐採跡や、 感ぜられても、それ自體は寫真に の中を幾時間も往く欣び、ひしと シラビソ等のうつそうたる原生林 いたりした。思うに積雪季の姿と 山の距離があり過ぎる場合が屢 レンズの對象とするべく聊か山 眺望のきく所で撮影を心がけても 頂上からの展望も先ず同じよ 切拂い かに 2

それでこそ南アルプスが昨今

普通のフィルムでは仲々搦めな に陷り勝。 結局デテー 又針葉樹林帶の遠望 ルの描寫の弱いもの は

地元も、

い」意味に於ても、

意味に於ても、

プロパガンダに

になる缺點があるとは云え、兎も り引寄せ過ぎて遠近の乏しい寫真 よる表現は時には遠い山々をあま 寫し得たことがあつた。赤外線に 圖らずも自分の意圖に近いものを 使用した赤外線寫真ではあつたが とに毎年失望したのだつた。その の見る者にうつたえる力の弱いこ 私もつくづくと南アルプスの寫眞 儘示すことになる。そんな次第で んだ山腹を何やらさつぱり解ら と云うてよく、 或る夏のこと出鱈目に近く 同様デテー ルの

後始末だつた。勿論昨今はと云う 出來なくなり、それつきりと云う ことで無論赤外線感光材料も入手 も再び使い出している。 が、再び國産品も出來ている。 てもやつと昨年あたりからである その後間もなく戦争苛烈と云う 私

h 質を嫌惡するかのように、赤のフ はないか――私自身の場合を申上 と必ずしもいたずらではないので 真となれば赤外線寫真で試みるこ しかないが、南アルプスとその寫 以上のような我武者羅な經驗で に撮影し のを使つたり、好んで薄曇り ルターを避けて濃黄なり橙色な 時には赤外線寫眞の本 たりしてはいるが。

員

支店に轉任した。 望月達夫理事は三井信託銀行神 か前のことである。 だ。ほんとに嬉しかつた。 に山腹の單調さを救つて呉れたの 新婚當時はよく山行を共にした妻

子供の一人二人も出

家族もちの山行

永 原 輝 雄

いればいる程、山への思慕が深ま ある。忘れるどころか山を離れて 二三年經つと、ぶつつり忘れた様 に山を顧なくなる事がある。 ていた男が、 生山の好さを忘れられない筈で 一度山への愛情を感得した者は 独身時代あれ程山に熱情を捧げ 結婚後家庭を持つて

らずも山から離れて行く気の毒な による家庭の拘束に縛られて心な ない不幸な人もあるが、結婚生活 支障から山を断念しなければなら かつている人の中には、健康上の 人もあるだろう。 家庭人となつてから山から遠ざ つていく事は肯定出來よう。

若い人にはひまはあつても金のか ないとはよく云われた言葉だが、 にも響き昔の様に簡單に行動が出 當な費用がかりつて、家庭の經濟 御時世では一、二泊の山行にも相 金の窮屈な時代である。殊に今の 年というところは一般勤人には、 い場合が多い。世帯を持つてニミ 昔から旅はしたいが金とひまが 山好きの夫に連れられて

れを私は次の様に裁いていた。 來る譯だ。私が山行に熱を上げて 惱があり、山を去つて行く男が出 族をつれて遊山に出掛ける事もあ ければならない家の中の用事があ 來るとそれもならず、 つたが、同様な惱があつたが、 いた若い頃にも今程深刻ではなか ろう。とゝに山に行けない山男の るし、たまには家庭サービスで家 否氣に好きな山行もしていられな 人たるもの家族を残して自分丈け どこの家庭でも男手を借りな 又一家の主 ح

り無理があつたが、その時分から なり手間がかるつたが……。 月二回の山行ということはかな

所屬していた或山岳會の例會には

する事は出來まいが 相當な苦心があつた。他の趣味は それにしても山行費用の捻出には うにか賄つて行けたのだと思う。 根氣よく出席して情熱を燃やして つきあいや喫茶は極力避けて小遺 て今日程割高でなかつたから、ど いた。旅費も全體の生活費に比べ た 境は山へのひたむきなものであ 節約をして山行に向けた當時の 切犠牲にするばかりか、無駄な これをその儘今の世に適用 窮屈な生活

様というものである。 からの彼の山行も、 時と金を作り出すことは心掛け次 気があれば、家庭生活にはいつて 快く玄關に送り出す位の妻の心意 ュックをかついで出掛ける主人を おやつの菓子まで入れて貰つたり ながら、心づくしの辨當に子供の めに、主人自身の努力もさること 第で不可能ではないと思う。 の中でも山へのあこがれを満す。 せめて月一回の山行を築しむた 持續してゆけ

くに行かれぬ若いパ、の爲に、 言申上げた次第である。 おいて貰いたい。せち辛い浮世の の明朗さを増すことを家族は頭に 義理にはゞまれて好きな山にも行 主人のレクリエーションが一家

後の二回を専ら山行としていた。

ービスで、外出と家の用事に當て

月四回の日曜の中二回を家庭サ

尤もこゝまで女房を教育するには

★闕西支部だより

秋季懇親會

名の豫定が僅と十名餘りに減つた 親會を二年振りに同じ季節、同じ かつた様だ。そんな具合で二十數 いて慌ててとび出して來た人が多 多會豫定者の足も大いに戸惑つた う中途半端な交通事情だつたので 八時過ぎには正常運轉回復、 ストに突入したものの程なく妥結 會場で催した。生憎當日は私鐵が は已むなきこと乍ら残念だつた **寝床でスト解除のラジオを聴** 昨年試みて中々好評だつた懇 とい

と徒歩で山莊に到着、 時間も大分遅れてバスとケーブル おそい晝食

果てた今日の六甲である。 が蘇つてくる。そして各々の山登 馴染を見付けるとほのぼのと郷愁 木立に圍まれた池畔の芝紅葉に昔 らず彼方此方の馬醉木の叢林や杉 その頃と比べればあまりにも變り スキーを擔ぎ上げた仁も尠くない スもケーブルもない頃登山したり 人の中には三十年の昔、六甲にバ を外れて靜寂そのものだ。會する 風の絶好の日和。雑踏のシーズン 「來年も是非やつて來よう。そし 朝來の霜深き六甲山頂は快晴無 山友達への舊交が温 にも拘

中村勝郎さんの言だつた。 堡壘岩へでも遊びに行こう」とは て前夜から泊りがけで朝の中には 影をして名残を惜しみつ」引上げ しばし、身も心も温まつて記念撮 すべてが心憎き迄に懷しい。歡談 さんの話、ロックガーデンの話等 め直される。故人となられた榎谷 りへの回想、 たのは既に夕日が西山に傾く頃。

十一月二十九日 太田記

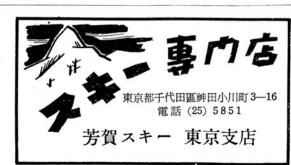
神田日活涌り

出席者 於住友電工六甲山莊 松村 田中 中原 太田 (榮) 岸田 小倉 金谷 中村 津田(康)

中

田山 グルスポー

神保町1の4



ギド・レイ全集の刊行

けぼの

許すと云つたそうだが) つたためだと云われる。(「マッ 潔癖な著者がその重版を好まなか を呼んでいる。これは謹嚴謙虚で 書界での稀覯書となり大變な高値 イタリアでは手に入らず、歐洲古 が、原著は殆ど全部絶版となつて ホルン」だけは悦んで普及版を ところが最近イタリア山岳會ト その讀者は絶えないのである イの著書は多くの國語に移さ

リノ支部で全集の刊行を企て、ア ッターホルン)が現われた。 その第一巻II Monte Cervino(マ ドルフォ・バリアーノ監修の下に 手もとに届いた特製本を見ると 一版、附錄の ノヴァレーゼ稿

て約三五〇頁、無地の麻表裝のお

「マッターホルンの地質」を含め

峯を四色刷りにし、同人の手にな もてに淺みどりの表題を打ちこみ 再版のものを忠實にのせたほか新 る本文中のペン畫ニ十二、全頁大 カバーにレオナルド・ロダ筆の憲 畫や寫眞の印刷があまり良くない ある。良心的な美本だが紙質と挿 二年以降の主な登攀目錄を添えて たな寫眞四を加え、巻頭に一九〇 二色淡彩のスケッチ十四と四色刷 一をはじめ、原著者やヴィットリ は人類最高到達地點の八六〇〇m なかつたといえども、當時として こゝには省略するが、登頂はなら 第四八年號に概述されているから スーンの時のものと共に「山岳」 征については、續くポスト・モン 隊員が分擔執筆している。との遠 ベール、シュヴァレー等何人かの 征の各項目を、ディッテル、ラン ストの登山史にはじまり、この遠 上を占め、M・クルツのエヴェレ ヴェレストの記事が全體の半分以 た。本書がその最初のものである

オ・セラ撮影の寫眞多數など初

"Alpinismo acrobatico"

クロ

バチック登山

翌年の英國隊のた

"Alba alpina" (アルプスのあ পে) "La fine dell' alpinismo" "Il tempo che torna" (時は移 (アルピニズムの終焉)

だから、その出版が待たれる。 る未發表の畫ものせるということ 載の珍しい文章とバリアノ稿レイ 文をのせる外、ふるい山岳會報所 つゞいて第二篇をなす未刊行の一 後の巻には、幼年時代の思い出に の三巻が豫告されている。 傳記が掲載され、レイの筆にな この最

0

THE MOUNTAIN

Foundation for Alpine Research An Annual Publication of Swiss WORLD: 1953

からその英語版を出すようになつ を發行してきたが、一九五三年版 "Berg der Welt" という年刊誌 山岳研究財團は、一九四六年以降 ヤ遠征の母體となつているスイス はじめとし、スイスからのヒマラ 九五二年プレ・モンスーンのエ 二回に亘るエヴェレスト遠征を

> 點から高く評價されるものである め多くの貢献をなしたことなどの その他前にH・Jにも載つて

眺めるに足るものである。 初めて吾々に示されたものとして ヴェレスト關係のものは、サウス ドの登山紀行が載せられている。 三六頁に亘つて北東グリーンラン 陸離というにふさわしく、あかず マ(A・ロック寫)はまさに光彩 クーンブ氷河周邊の山々のパノラ また別刷折込みで添付されている 記錄的にも價値高いものであろう ・コル附近や北東山稜の樣相が、 ギリオネのアンデス紀行、最後に るマイヤールのゴサインクンド紀 しく印刷も極めて美しい。 多數挿人された寫眞は皆素晴ら エルテルのボリヴィアの登山 殊にエ

かきれいな出來ばえである。 面、地圖十二。本としてもなかな 二〇頁、寫眞六〇葉、パノラマー 編集主座M・クルツ、約B5版二 されることは樂しみの一つである で、こうした年刊誌が續けて刊行

Vol. LIX MAY 1953 No. 286 ALPINE JOURNAL

峯征服を記念して山岳人におくる待望の二書

朝日譯新聞社器

A 5 豪華本

如

號別記の圖書等)があるにしても ス隊の方は別に詳しい報告(會報 に一〇頁ばかりの短文だが、スイ ウをエヴァンズが書いている。 五二年のシプトン隊のチョ・オユ をアンドレ・ロックが、また一九 六九號に紹介された寫眞集や本 ヨ・オユウの方はも少し詳し 年春のスイス隊のエヴェレスト ヒマラヤに關するものは一九五 との行は續く 共

1953年 登山隊長

大自然との闘 が自らつづる 長ハント大佐 イギリス隊々

朝日新聞社編

一九五一年秋、五二年春のイギリスで、一九五一年秋、五二年春の大野な、野の貴重な記録寫を果したイギリス隊に至るまで、そを果したイギリス隊に至るまで、その数次に亘る遠征隊の苦闘と、輝くを果したイギリス隊に至るまで、その数次に亘る遠征隊の貴重な記録寫が、五二年春のイギリス 記事 を永遠に記念する歴史的寫眞集! エヴェレスト登頂史 藤

九宋 三

發賣五〇〇圓 二月豫 價

ラビア ・ート 20 頁 定價 350 (好評發賣中)

日新聞社發行

榮譽に輝く

とげられたか 何にして成し エ峯征服は

Nanga Parbat Herrigkoffer, K

て、遠征後の不快事の章で終つて な英斷準備の結果と經験につい 進、高所順應と最初の攻撃、劇的 ヘンからギルギイトへ、山への行

なお最後に科學的な體驗報

(8頁につづく)

lag München 1954 1953. J. F. Lehmanns Ver-

面と四色刷一〇葉(これは片面の 文一九二頁、別に挿入寫真版八四 裏は何もない。前書等一五頁、本 1953 とスクリブト風にあるだけ、 表紙は表と脊に Nanga Parbat ート)印刷、縦七寸五分、横五寸 紙はコットン紙(但し寫真版はア 本綴薄水色クロース、装幀、 一九五三年七月のナンガパル

リスが變ることなく繰返してきた うな輝やかしい記錄の蔭に、イギ るからだ。エヴェレスト登頂のよ まで偵察を行つた重要なものであ 試登のみでなく、マカルウの近く 隊の後をうけて、チョ・オユウの スタン・クームへ入つたシプトン 備もかねたものだが、初めてウェ 九五三年のエヴェレスト登頂の準

こうした地味な遠征には教えられ

改撃に來合せていたというのであ マン・ブウル。 いる。その最後のアタックはヘル の最大の要素となつたともいつて る。そうした天氣が登頂の幸福へ 丁度その時にドイツ隊がその山を 對に雨ばかりの夏だつた)そして そうである。(わが國ではその反 かという好天氣が續いていたのだ アト地方は百年に一度あるかない

協會から一八九八年ゴールドメダ

注意をひく。ヘデインは王立地學

スを誹謗したことから、その名譽 **戦當時彼がドイツを辯護しイギリ** メダルを授與されたが、第一次大 ルを、一九〇三年ヴィクトリア・

會員の席は消失され、又一八九九

ラインによつて綴られているのが

アジアに因縁の深い C·P・スク

贔負のスウェン・ヘディン(一八

追悼欄には近年長逝したドイツ

六五―一九五二) の追憶が、中央

ること少しとしない。

成者表となつている。 次、最後に寫真撮影者及び附圖作 イクコッファ博士のはしがき、 ある隊長のカアル・エム・ヘルリ の序文、役員名、本書の編著者で ヘン支部第一主席のヌバア博士と ュンヘン) とドイツ山岳會ミュン づ、トオマス・ビンマア市長(ミ 内容を一覧すると、巻首にはま 目

われわれには往年のヴォリューム

號も一○○頁餘りの薄いもので、

最近のA·Jの例にもれず、本

等國ばかりではないらしい。 これで見ると印刷費が嵩むのは四 のあつたナムバーがなつかしい。

編集

本文は準備、登攀略史、ミュン

者は引きつゞきグラハム・ブラウ

られている。

得ぬこととして、その生涯が述べ

比類稀な業績を残した事實は忘れ 然し、彼が中央アジアの探險史上 ら一九一四年の秋以來失われた。 ブの名譽會員も同じような理由か 年に推撃されたアルパイン・クラ

トとして發行された。 ける五三年のクリスマスプレゼン ツ國民に詳しく傳えるためその輝 この書はその登山の喜びをドイ の一つだ。

エヴェレストへの闘

が開かれたことは、その登山史上 い、エヴェレストの南側のルート 第二次大戰後ネパール開國に伴 (一九五一一三) 朝日新聞編

> 良心的な編集は山岳書としてエポックを畫するものである。 され、これだけでも遠征の外郭が手にとるようにわかり、この できあがったマナスル説明圖の三枚に、大きな運行表まで挿入 された中央ネパール・ヒマラヤ槪念圖、今度の測量ではじめて こんだヒマラヤ概念圖、踏査、登山、科學の三コースが色わけ

告として、 加えられ、前項はライヘル博士 ナンガパルバアトの氣象の二項が ンク等によつて記されている。 が、後はアルベルト・ビッテルリ そして本文の「劇的な英斷」こ ヒマラヤにおける人體

寫眞がある。 ある。そして「頂上雪原のブウル 帰る。勿論凍傷。というあら筋で は天氣がよかつた。翌日テントに 殆んどストックを肌身離さず使用 のピッケル」と説明された色刷の とも危險なのである。その長い夜 ているだけである。足を動かすこ **ヴークときめるが、たゞぢつとし** にもならない。八千米の高度でビ していた)で降りにかるるがどう てスキーストック(この攻撃隊は ると陽がくれる。ピッケルを置い に着くのである。そこで寫真をと なかつた)から頂上へ夕方の七時 いにこれだけしかキャンプは出さ の當日七月三日第五キャンプ(つ つているのである。彼はその登頂 そ彼ヘルマン・ブウルの舞臺とな これが彼のおみやげ

この五月頃には出版の筈であるこ ある。はしがき中に英、佛、西、 う大型の寫真集が出ているようで とを附記する。 した旨を記してあるが、日本でも 伊、ノルエー語に飜譯契約が決定 「魅力のナンガパルパアト」とい なほこの書店では別冊とし (小野幸)

が集録されている。

折りこみには、ヒマラヤ・ジャイヤントの登はん記錄をおり

☆詳細に解説、檢討され、それに英文で兩隊の概要、

寫眞說明

日本山岳會編

1952-3年

B 5 判・寫眞 66 頁・本文 200 頁 2月發賣・豫價 700 圓

會員には特典を考慮しており 日本山岳會で豫約申し込み受付中 田カメラマンのものを中心に、中尾隊員の撮影した科學班の珍 ぼうをあますところなく紹介する本がいよいよ刊行される。 内容のトップは天然色寫眞を含めて、隊員として参加した依 マナスル再擧を前に、一九五二年踏査隊と五三年登山隊の全

學的考察、寫眞、經費、文献目錄の項目が擔當隊員によって☆ 高記に、シェルパ、装備、食糧、氣象、動植物、人文地誌、醫 本文は今西、三田兩隊長をはじめ各隊員によって綴られた登 しい寫眞など約百八十枚で飾られている。

每日新聞社發行

今村幸雄氏 を か ح

八年)大阪クラブで開いた。その 先輩紹介の辭を以てはじめる。 富田幹事の挨拶、小島榮氏の今村 錄音されたので、それによつて當 際大阪倶樂部の希望でその座談を 秋會の例會を十月廿四日 活躍された今村幸男氏を圍んで春 治四二年入會)曽て評議員として 日本山岳會創期からの會員で(明 の模様の大略をお知らせする。 (昭和二

> 登山界の發展の爲には蔭の力とな 村さんは非常に協力して下さり、 具を陳べて展覧會をやつた時も今 座でテントを張りスキーや登山用 めた時も、又その翌年大阪の近松 大正三年だつたか三高山岳部を創

> > でした。

年頃までが日本アルプスに於て最 る。その内明治末期から大正五六 にも夙に足跡を印せられていられ く登られたのは勿論歐州アルプス 氏を訪れる人の絶えない方であり National City Bank of New ランであり、財界では非常によく 山の方では日本アルプスをくまな York の重役を始め世界金融人の 知られた方で先般我國に來訪した 國における國際的な金融界のベテ に御紹介します。今村さんは我が 存知ない方もあろうと思い、簡單 られんようだが今村さんをよく御 ても最少四十五六歳以下の人はお と致しましたが若い人達、といつ 小島本日は今村先輩を圍む會

も活躍された頃で、立山をはじめ 總裁から大藏大臣になつた結城豊 は實に深く印象に残つた。 當時の山登りの相棒は後に日銀

り股までもぐり乍ら下山してきて も丁度その時伊吹に雪中登山をや 素手で登つておられる。又關西に 駒ヶ岳など、 ので普く登りつくされています。 おられるし六甲には別莊があつた ので比叡山には百回以上も登つて いた次第。京都にも長くいられた はじめてスキーをやる人をみて驚 はじめてスキーをやられた方で私 おいては伊吹山で中山蔵次郎氏と 私が關西にはじめて來た頃ー 前穂もロープなし

幕を引いたように上つている雄姿 も見える富士、それに淺間の煙が れたようなわけで、どこへ行つて 高、槍を遠望して登高欲をそゝら の御岳へ登つてみて更に又笠、 な高い山へ登りたいなと思い、そ 北東に御岳の雄姿を遠望してあん 登つたのがはじめです。そこから の山登りは大和の大峰山と伊吹へ にも隨分厄介になりましたね。私 もらいましよう。藤木さんあなた がまあ好きな山の想出話をさせて こんな難しい會とは思わなかつた れ)喋るとみんな入るのですか。 錄音の爲の小さいマイクを指さ の想出話を交して頂くことにした 本日は一つ若い人々とも大いに山 歳になられたが益々お元気なので つて隨分寄與された。今年は八十 今村 いやどうも。これは(と

又一人でシュレックホルンへの途 後からやはりガイド でおりて氷河見物に行つた時です ングフラウヨッホ見物をし、翌日 行つた時インターラーケンからユ 登山電車の行きちがうところ

つて力づけたことがあつたが、 ないか、天に任せるんだな」とい ら今迄生きたのがもうけものじや とも死んだようなもんだ。あれか 高行の想出話をして「あの時二人 僕は死ぬよ」というので、この穗 前に僕を枕元によんで「今村もち 勿論落ちれば結城も僕もその時死 まわさんばかりの怖い思いをした から下をみて深く切れた谷に目を 入れかえて助かつたが、その時股 の石がぐらついて一瞬左手に力を 正に頂上へつこうとする時右手 ちないかとやりつつ登つたもので ういう具合に動かしてみて崩れお のはやはり穂高で結城君と一しよ 山へ行つた。登山中で怖しかつた で年一回の銀行の休みには必らず 手がつけられない程でした。それ からはじめたものかもう嬉しくて さあどこへ登つてよいのやらどこ アルプスの大觀をぐるつと眺めて 後立山、藥師、槍、穂、笠と日本 崎光瑤君も一緒でした。立山から ヒマラヤへ植物の寫生に行つた石 學者)雉本君(民訴學者)それに 行つた時は京大の市村光惠(憲法 へは結城と二人で登つたし白山へ く登られたのは立山、白山で立山 店長をしていた。當時高い山でよ 太郎君で京都時代の結城は日銀支 んでいた。先年結城君が亡くなる から間もなく亡くなつた。 一つ怖い話は歐州アルプスへ 當時は鐵鎖もなく石をこ 早速用意の ザイル を持つて來て 様子、よくはまるものとみえるね。 甲州駒へ強行したあと八ヶ岳にも 下へ入れる。下で I am safe と こんだのです。丁度近くの小屋に その頃長谷川如是閑が 碧梧桐と が昔の針の木は非常にえらかつた たことがあつた。今でもでしよう 大町、針の木、黒部と登りつぶけ た。何年だつたかな爺、鹿島鎗、 で助かつたが實に道がよくなかつ つてね、まあ食物を持つていたの とう一人で行つたがひどい目にあ が駒でへばつてしまつたのでとう 廻ろうと同行の市村を隨分誘つた 元氣で無茶をやつた。信州駒から が、そのま」の光景で寒氣を覺え になつていたという物語があつた 骨のみつかつた頃には新妻は老婆 氷河見物に來て主人が落ちこみ遺 ルを引ばりあげたが、新婚夫婦が が下降し私も一しよになつてザイ いつているらしい。案内人の一人 の下へ話しかけると死んでいない いた案内人がとんで來てクレバス をきいた。主人がクレバスに落ち 來ていた夫婦づれが大聲で叫ぶの たもんです。しかしあの頃は全く

とはない。黒部へ下りて磧で露營 私が指導したとか。いやそんなこ ていた。本にも書いていましたね れが山登りの始めの終りだといつ へ來た時その話をしたもんだがあ に出あつた。先日も如是閑が大阪 ので巡査を大ぜい護衛に動員して 瀬作造君というのが長官をしてお 山温泉へ出たが當時、 ではひどい雷にあい一泊。翌日立 したが之が一番愉快でした。五 一しよに針の木から蓮華へ向うの つて我々が立山温泉へくるという 友人の木間 色

n

正してほしい。 みたしてくれたのが本書なのであ と思つていたが、その希望を一應 それだけで價値が高いに相違ない 心にして一冊の本にまとめられる さらに一九五三年のハント隊の登 ウ、スイス隊の二回に亘る攻撃、 大きな轉換なのだが、戰後はじ 間違いだから版を重ねる場合は訂 ン・クラブの會長であつたという が、ヤングハズバンドがアルパイ わかり易く、年表も親切な試みだ 優れた出來である。後半の本文も の印刷も定價を考えると、まさに 寫眞版一二頁、グラビア版九六頁 まだ表われてないようだ。しかも る。このような企畫は外國でも、 曽て見られなかつた南側の寫真は ならば、これは非常に便利であり 頂、これら一連の記錄が寫真を中 て南側の偵察をやつたシプトン (一九五一) 翌年のチョ・オユ (七頁三段目よりつづく) (記事三頁下段) は明らか

★マナスル登山隊員決る

十三日左の如く決定した。(カツ本年度マナスル登山隊員は一月 コ内の年號 は入會年)

即郎(昭 昭242111 美寶雄(昭212929 一美(昭2824 雄音(昭2816 益(昭24 太(昭 一(昭5・ . . . ٠ • 37 47 29 37 35 23 23 23 29 30 32 33 43 44 <u> オオオオオオオオオオオオオオオ</u>オ

くれ歸つてもらうのに一苦勞した

そうですが 今村 あれは物笑いになるよう 比叡山 へ百一回登られた

にと大いに困つているので、では もぜひ出席して頂かねばならんの の實業家を招待してあつてそれに の結城の宿へ行つてみると、支店 約束してしまつた。その翌日京都 發打つか知つとるか (笑) といつはよいことをいう、君は祝砲は何 以上はやめにしときたい。そうで へ登る約束がしてあるからどうで て大いにするめるので行くことを とに(笑)なるのでというと結城 ないと又百十回百二十回というこ れこれで百回登つたのでもうこれ つて來た。そしておい今村比叡山 君が日銀の總裁になつて京都へや と思つていたのです。そこへ結城 した(笑)これが山登りの最後だ これでまあ子供のような望みを達 のにむりをして百回にしたのです よいチャンスとばかり用務の多い せに歸國した事があつたので之は へ登ろうという。いや實はもうこ つた。ところが二ヶ月程事務打合 と思つてると外國へ行くことにな 回になる。百回にしとくとよいな つた回數を數えてみると九十四五 らずつと日記をつけていたので登 比叡には登つた。私は少年の頃か なことで……京都にいたのでよく り、病床の結城が「君と約束し が結城君を説得しようと二階へ ら
数熱して
醫者は
大切に
せんと 行くという。二三日後には京都 か誰かがやつて來て總裁は昨夜 かんというのに今日は今村と山

> つた (笑) うく、又一回、ついに百一回とな てきてやるから」と説きつけてと あ今日の山登りは僕が代りに行つ から」というのをむりに制して、 醫者は絶對安靜というのだしま

並んでいるのに登つた。元氣だつ ルの上を歩いていつた。 たんですね。鐵道があつたがレー くプレシデントラインと呼ばれて ンド州の一番高い山がカナダに近 で。アメリカではニューイングラ 今村 中原 がなくて百回にならなかつたの そうしないと歸米までの 一日に二回登られたとか

しよによく登りましたね 中原 神戸の裏山へ御家族と一

いるか一度見に行きたいと思う。 がついてしまつた。今でも残つて でとうとう今村ストーンという名 ここで一服することにしていたの い易い別れ道だつた、私はいつも 踏雲會建之とした。そこは一寸迷 り口だつたが、そこへ石を据えて の雲母坂から修學院へ出、右へ少 作つて山へ行つたものです。京都 し入つたところが僕の比叡への登 漢學者の命名で踏雲會というのを 小島 あれはなる程腰かけるよ 京都では加納直嬉という

があの頃は全く道もなく人足もい たと憶えている。今は中房から燕 年頃に巻ゲートルをはじめてつけ と後に輸入したので明治三十八九 時のはき物はどんなものでしたか へはアルプス銀座とよばれる程だ 西では隨分發達していましたが當 今村 普通の靴。 田中薫 毎日登山というのが關 道具類はずつ

> け。神河内では嘉門治にもウエス く道に迷つたりして。 ませんよ。 あんな山へは今では登る人はあり 小島 今村 あの時は結城君も一しよ

支配人だつた志立鐵次郎さんとそ が……そう之も古い話だが住友の 巻全部そろつてまだ持つています とする山岳紀行集・非賣品)十八 (日本アルプス及び六甲山を中心 今村 そう、ドントの INAKA 六甲山のドントもね。

り淋しくなつたね。 でやつとそこを通り下りた。 を揃えてどなると逃げてくれたの でもあるし大いに困つたが皆が聲 を通らねば下へゆけないし女づれ をたべているのに出あつた。そこ が三十匹程やつてきて残したもの 登りに辨當をつかつたところに猿 山へ登つて頂上から下りて來た時 は福澤諭吉さんの娘さん―― 伊吹 のお嬢さんの四人で――志立夫人 結城はじめ市村も石崎も亡くな

い最近亡くなつたようだ。 キーを教わつた中山才次郎君もつ です。早いものですね。伊吹でス でしたね、 藤木 小川琢治さんも山が好き あの人も今年は十三回忌 湯川さんのおやじさん

うに出來ていた。いゝ格好にね…

姿を見出しそれに憧れて又そこへ 頃ではある山へ登つて未知の山 登つて てきているのを痛感します。この いて昔と今の山登りが大變ちがつ 今西 今村さんのお話を伺つて 行くと いうような山登りは 0

小屋も實にひどいものでした

トンにも會つた。西洋人は割合よ 徳本峠もえらかつただけでな 有明へも登られたそうで 地圖は形だ 登山のよさはそうしたところにあ は一番若い組に入ります。しかし 最後の人間かと思いますがここで ると思うのだが今はそれが判らな 山登りをしたオールドスクールの が今村さんのお話にあつたような りをやつているようです。私など る専門家が出來て細いところばか 行われない。一つの山ばかりを

く日本の山に登つています。

るが……

藤木

登山と探險の問題にもな

小島

豫定の時間も大分すぎた

が.....

いうことは關係ないと思うのです い人が多い。人が登つた登らぬと

今西錦司、二木信次、富田健一 藤木九三、 今村幸男、 のでこの邊で閉會とします。 田中薫、粟飯原健三、 小島榮、中原繁之助、 (文責在TOM生

同誌は今年八月頃刊行されるであ チマップを添えて送付した。因に は高木氏執筆、寫真數葉にスケッ 付されたき旨來信があつた。記事 Welt の英文版) 收載用として送 1954》(同財團年刊誌、 記事と寫真を《Mountain World, 研究財團から、マナスル遠征の ★會員高木正孝氏宛でスイス山 Berg der

息

て赴任した。 ツト株式會社北海道出張所長とし 丁目二ノ二東邦ビル、日本カーリ 藤井運平氏 札幡市北一條西四

う峠路は味いがある。小舎がひる 嶺の中央赤石岳の眞西に當り、 折柄の夕日にかぶやいていた。 の峯々が、美しい雪の縞を入れて て木曽駒を縦にみる眺めも珍らし 御料林であつた見事な森林を縫 ポーターをかえして最高點 鋸岳から南へ連る白峯赤石 御岳、 乘鞍、 穂高、

渆

なる外は、文字通り一列横隊であ るまい。甲斐駒と仙丈とがやゝ重 の展望台としては、他に比類が するこの富士見臺は、南アルプス

たゞ富士の見えないのはおか

聖か赤石の蔭にかくれて

けられたとの話。

がみたい」というところから名付

いるようだ。麓では

「見えぬ富士

川喜多壯太郎 敏男

充たされたのだから、この『山あ る山なみの展望、これらの條件が ない山小舎の泊り、えんくと連 黒木の茂る日本的な山、 人ツ氣のない靜かな山、深々と 大層たのしかつたとい 煩わされ

十一月七日午後中津川 噌野泊。八日霧ケ原 富士見台萬岳莊。 ス 0

富士見台と惠那山

である。 間惠那は思つたより大きい深い山 返えす。 から雪をみる。 下すること數知れず、千八百米位 |惠那山に登る。大小の突起を上 九日神坂峠から郡境の尾根傳 歸着午後六時。 石室に小憩して直ちに引 山頂午後二時。 往復九時

達も大いに助かる。 梢越しに赤石・ 口くと燃して、 いの村近く、赤い實の残つた柿の 夜を過ごした山小舎を去る。谷合 繪があつたる Ė こんなときはバス路線の よく乾いた大きな薪をト 園原から飯田まで 聖を眺めやる一幅 温かく快よいこ

を眺めさせようとてか、 町 信州路甲州路を、 た晝汽車は、雪のあとの日本晴 も白一色の初雪。 十一日上諏訪の朝は、 心ゆくまで山 ガラガラに空 Ш る湖も

東へ走つた。

えザイルやピッケルで互に體を支

懸念されていた水量も一段とふ

え合つて渡渉した。

この邊から雨

、佐藤隆太郎氏と同行しました。

特

選

地獄谷からバンバ島へ

111

和

宏

谷をへだてて適當の距離に位

々に見る事が出來るが、 バ島方面に運搬していたことがあ 者も谷間の雪溪を利用する期間だ の登山路も全くないらしく、登山 硫黄を室堂乘越を越えて、バン 今でもケーブルカーの跡を所 から二十何年かの昔、 今ではこ 地獄谷

で一泊した。 前八時半出發してその日は地獄谷 ・ティは立山の登山口栗巢野を午 私達三名のパ

なり、 合着。 乘越から立山川への下り口はわ 東大谷岩屋は目の前に口をあけて 谷の水は急に水量を増して渡渉と 谷間に出た。十一時半、 三十分後には花崗岩の岩石の多 に見失つた。雪溪も消えている。 を出發して室堂乘越に至る。 時毛勝谷出合に到着。 かの足跡の型が残つていたがつい いる。ことで晝食、一時出發、 劍岳の孫とも思われる樣な 地底から湧き出る樣な東大 東大谷出

け(六月一八月)稀にいる様である。 今度地元の上市山岳部の協力で渇 水期にこのコースを登行した。

十月一日 午前九時地獄谷

茂みの中に續いている。所々イタ 原竹程もある様なイタドリの林を を分けて通り抜けた跡があり、 を探すことにして右岸をよじ登つ れるとは思えなかつたが昔の道跡 ぼに出合つた。兩岸も突き立ち登 ぎ高さ二十米もあると思える流 着いて一泊。 急に前方が開け五時半バンバ島に 續く熊の道だつたのかも知れな 率も上つた。バンバ島から立山 の跡を行くにつれて場所もよく態 熊に相違なく、 ドリの根を堀つてあるのを見ると たくみに、そして危險な所を避け 舊道の跡らしいがたしか草木 困難な渡渉を續け、 氣味惡かつたがそ

秋 0 神 流 JII

晩

末 肇 延

場町までバス。荷物を置いて西 鬼石を經由して神流川に沿い、 朝再びバス(終點乙母)で神流川 荷鉾の頂上を往復し町で一泊。 ほどでした。御荷鉾では偶然、 秩父を通つて歸りました。紅葉に 道にわかれて、股峠への道を辿り 邊を溯り、 上州の山を旅行しました。 すでにおそく、日溜りが戀しい 十一月二十二、三日の連休に西 (西岳) に登り、 納宮からバスで小鹿野 中の郷で下車、十石街 武州坂本 캦

6000

STORE



單板各種取揃えて

東京都日本橋八重州通り 住所 TEL (27) 3318 · 3875

会 務 報 告

出席者 交野・今村・大塚・山田・加藤 (泰)望月・金坂・沼倉・評議員 會長槙 理事成瀬・渡邊 役員總會(十一日

村井·監事石原·林

沼井・神谷・岩永・島田・堀田・

白遠征隊員は十一月二十日頃まで 兼任のこと。 ─ヒマラヤ委員會長は棋本會々長 に着手し以後順調に進行している 結果左記事項を決定し諸般の準備 行委員會進捗狀況 十月十九日第一回兩委員會開催の 行委員會進捗狀況 成瀬一、ヒマラヤ委員會並びに登山

包) 右九名に配するに各大學OB 裝備)加藤(喜)登山器具裝備) 關係)望月(會計)村木(通信裝 三田 (總務) 谷口 (庶務::對每日 四登山實行委員會委員擔當任務 辰沼(医療裝備)千谷(裝備品梱 備)村山(寫眞裝備)山田(食料

の外にゲスト招待を考慮すること 開催の事とし當日は本會名譽會員 十一月二十五日東京クラブに於て 二、本年度年次晩餐會の件 成瀬

三、來年度海外遠征に關する件

委員會より要求ありたる一九五四 外貨割當海外遠征に關し體協國際 度海外遠征計畫については本會

> 大・立大・福岡山の會に對し通知初旬當件を東大・早大・慶大・明 りまとめる立場にあるので十一月 は 本邦各登山圏隊の遠征計畫を取

る件 沼井 四、本會五十周年記念事業に關す

五、ヒマラヤ科學研究會の件 委員人選決定は常務理事に一任 早急に實行委員會を設ける事とし 沼

t 六、 はの意見もあり更に檢討する事 ず全般的な登山科學研究會にして 對しては對象をヒマラヤに限定せ とし資料蒐集並に研究する本案に ヒマラヤ登山に貢献する事を目的 第九回國體登山行事報告 「山岳」第四九年編輯委員の 槙

八、本年度マナスル登山隊使用 を決定のこと 望月理事擔當として追而他の委員 裝

口・千谷・辰沼を追加のこと | 登山實行委員會委員に望月

· 谷

備品處分の件

に決定の豫定

上に使途を決定の事とす については毎日側の承認を得たる した。右賣却金額金廿二萬八千圓 不用品目を撰定し一括賣却處分を 並に來年度登山實行委員會に於て 八月役員總會決定に基き三田

 (\exists)

マナスル登山實行委員會進捗

25八九五二番 十月二十三日架設許可あり、 館の依賴により寄贈の件報告 九、マナスル登山隊使用天幕一張 (使用不能のもの) 大町山岳博物 本會圖書室電話架設の件 神 Ħ

書刊行の件 十一、朝日新聞社に於て登山入門

門」企畫の由につき本會に對し協朝日相談室シリーズ中に「登山入 ることとし林監事を中心に擔 力を求められた。本會は右に應ず

・島田・谷口・村井・監事石原・ 員神谷・沼井・日高・別宮・岩永 ・交野・沼倉・金坂・杉本・評議 十三、入會者承認の件 役員總會(九日) 會長槙 理事成瀬

一、高頭名譽會員御見舞の件

とする。 を納入された場合には受領する事 るものとする。但し自發的に會費 員に對してはその取扱いを繼續す を待つて定める事とし、現終身會 終身會員制度については定款改正 昭和二十三年以來停止されていた 二、終身會員制度の檢討 に高頭氏を訪問御見舞の件依賴 本月二十日槙會長及び松方評議員 成瀬

演會開催の件 寫眞寄贈を受けたる件 成瀬 三、報告事項 高校生對象のマナスル映畫講 大島堅造氏よりウェストン師 成瀬

で全部完了の豫定、 装備について―十二月二十日頃ま 裝備總重量三

量の三千食・荷造り總量七千キロースキャンプから先に使用する分 食糧について―總量五千キロ・ベ

以上荷物の全重量約十一ト 酸素について-重量約三百 燃料について一ケロシン二二二鑵 ター約四百 ・ン右に 十口

月例會計報告 る 沼倉 ・渡辺

成

近く決定のこととす。

入した。 をもつてスライド映寫器一臺を購 ナスル募金關係にて増刷の「山岳」 四十八號五百冊代金に充當し残金 十二萬八千圓の内金二十萬圓はマ 毎日側の承認を得たので處分金二 處分金の件 五、本年度マナスル隊使用装備品

エベレスト映畫封切に際し朝日新 聞社の依頼により「世界高山表」 こととす 松方・成瀬・渡辺・林にて考案 七、エベレスト映畫の件 稱)編纂の件 六、朝日新聞發行 「山登り」 島田 田 (假 にエベレスト・アンナプルナ・パ 渉外關係事務について―サー す。梱包費豫算約七十萬圓 システムにより分類整備のことと 梱包について―カートンボッ ・ヅック袋二重梱包とし、 カラー クス

をなす。又通譯は本年同道したデ バーに交渉し契約す。外にシェル イリー氏に交渉の豫定。 パ二十五名についてはヒマラヤン ンチチュリ等の遠征經歷あるアジ ・クラブのヘンダーソン氏に依頼

び各人相互の信頼感等を考慮の上 力を主眼として選びたる十名に對 隊員の詮衡について―チーム登攀 し身體檢查を完了。個人的事情及

係は早川種三氏を中心に進め毎日 關に接渉中である。 側に於ては渡瀬常務擔當し政府機 裝備品倉庫として國分商店の一室 を提供され使用している。 四、ヒマラヤ委員會進捗狀況 募金關

日記」より檢討作製し 作製の依頼あり、望月、 (日本山岳

九、國體行事に關し地方岳連と連 題もあるので基本的方針を確立す ため一時保留となつた。今後の問 本會において未だ確定していない 絡強化の件 ること」する。 に於て山岳部門開催地に關しては 十二月十二日開催國體準備委員會 第十回國體開催地に關する件

の會」よりトリチミル並にカラコ海外遠征外貨の件に關し「福岡山 地方岳連と充分なる連絡を計つて今後國體行事準備運營については 十一、立山開發鐵道バス道路の件 まつて説明することとして體協國 明であるが後日詳細資料の到着を ルム遠征計畫書提出あり、詳細不 十一月役員總會に於て決定したる 十、「福岡山の會」ヒマラヤ 處理するようにしたい。 際委員會宛提出した。 遠

十二、月例會計報告 であるので改めて抗議した。 たが、最近に室堂まで延長の計 バス道路については反對を表明し 先年本會の意見として追分以上の

昭 和十 一月廿五日發行

行所 神東 法社. 田京 河 日本山岳 Ŧ ・豪四ノ六 會

東京都港區赤坂溜池五番地 振替口座東京四八二九番 電話神田(25)八九五二番 渡 公平